

上代語の句構造と語順の制約について*

柳 田 優 子

上代語の格助詞「が・を」の研究は日本語の句構造の変化を知る上で重要なテーマであるが、伝統文法の枠組みでは「が・を」を個別に調査分析している為、句構造の特徴について正確な情報を得ることができない。そこで、本研究では万葉集 4516 首から同一節内にある主語、目的語が共に明示的に表示される他動詞構文を調査し、日本語史における句構造の変化について考察する。

1. 背景

上代語では「を」で表示される(1)と無表示であらわれる(2)の2つのタイプの目的語が可能である。注¹

- (1) 海の底沖漕ぐ舟を (乎) 辺に寄せむ風も吹かぬか (1223)

'Far from the offing wind comes blowing so as to invite the ship far out on the sea.'

- (2) 難波の宮にわ^{なには}ご^{おおきみ}大君 国知らすらし (933)

'In the Naniwa Court, the emperor might reign all the land.'

無表示目的語は原則的に動詞と隣接条件を満たすため宮川(1989)の提案によれば、英語と同様に動詞は抽象格 (abstract Case) を項に付与する。一方、「を」は形態格であり、項に対して内在格 (Inherent Case) を付与する。そのため表示目的語は動詞句内から自由に scrambling され動詞と隣接関係を満たす必要

* 本稿の内容は2003年7月26日上智大学国際言語情報研究所創立25周年記念大会で口答発表したものである。会議に先立ち、また席上で、金水敏氏、福井直樹氏、宮川繁氏、本橋辰至氏、渡辺明氏など多くの方々から貴重な助言をいただいた。今後、諸先生方のコメントを参考に論文をさらに改訂していきたい。

注¹ 万葉集は原文が本来すべて漢字で表記されている為、格表示される項は、底本(西本願寺本)を対象となる漢字表示があるもののみを抽出し、例文中のカッコ内に表記した。

はない。scrambling は一般的に自由な移動であると考えられるが、この自由性をミニマリストの観点からどのように扱うかは重要な課題のひとつである。

Fukui (1993) は言語の主部パラメータの値から移動の自由性の問題を解決しようとしている。

(3) The parameter value preservation measure (Fukui 1993)

A grammatical operation (Move α in particular) that creates a structure that is inconsistent with the value of a given parameter in a language is costly in the language, whereas one that produces a structure consistent with the parameter value is costless.

(4) Canonical Precedence Relation (CPR)

a. English: $V^0 > Y^{\max}$

b. Japanese: $Y^{\max} > V^0$

Fukui (1993) によれば、(3-4) で示すように日本語などの Head Final 言語の移動はパラメータの値に常に一致しているので、負荷がかからない。そのため移動が自由である。一方、英語などの Head Initial 言語の移動はパラメータの値と矛盾する為負荷がかかり移動には Last Resort 原理による移動の動機づけが要求される。

本稿では、上代語の無表示目的語は動詞句内で動詞により直接格付与され、動詞句の外側の機能範疇へ移動する目的語のみ「を」で表示されるという実証的証拠を示す。すなわち、「を」は形態格ではなく、強制移動した目的語に意味的要素を付加するいわゆる間投詞として機能する。表示目的語の移動は強制移動であるという事実から、OV 言語の移動は負荷がかからないという Fukui (1993) の (3-4) で提示したパラメータをどのように捉えたらよいかという問題を扱う。

2. 上代語の句構造

万葉集から明示的 2 項をとる他動詞構文を調査した結果、上代語では現代語と異なる興味深い語順制約があることが観察された。他動詞構文が基本語順である SOV 型の場合、主語が「が・の」で表示されると、目的語が無表示になる例が万葉集全体で 88 例観察された。この構文を I 型構文と呼び、(5-12) に

例文を挙げる。

I 型構文 : XP が・の XP V (88 例)

- (5) わ^{おほきみ}ご^み王^こ皇子の命^{みこと}の(乃)天^{あめ}の下知らしめしせば (167)
 'When our graceful and noble Prince was to reign the land,'
- (6) わが^{うまな}日の皇子の(乃)馬並めて (239)
 'Our Prince of the Sun ranging his horses,'
- (7) さよひめの子が(何)^{ひれふ}領布振りし山の名 (868)
 'the name of the hill where Sayo-Hime waved her scarf'
- (8) いづくにか(加)君が(之)^は船泊て草結びけむ (1169)
 'Which port in the world did your ship cast anchor at?'
- (9) 志賀^{あま}の白水郎の(之)塩焼^{けぶり}く煙風 (1246)
 'the smoky haze raising when fishermen of Shika burn salt'
- (10) く^{さきもり}にすらが(之)春菜摘むらむ^{しば}司馬の野 (1919)
 'the plain of Shima where the people of Kunisu pick the soft greens of spring.'
- (11) 防人の(能)堀江漕ぎ出^{こづ}る伊豆手舟^{いつてぶね} (4336)
 'the boat of the Izu style that the frontiersmen row down along Horie'
- (12) 少女^{をとめ}らが(我)玉も裾^{すそ}びくこの庭^{には}に (4452)
 'Through this fine garden where maidens trail scarlet skirts'

I 型構文は原則的に従属節か、あるいは主文で疑問文などの「係り結び」構文に表れる。一方、上代語には主語、目的語が格表示される SOV 型 (II 型構文と呼ぶ) は存在しないと考えられる。これは上代語で「を」で表示される目的語が数多く存在するという事実を考慮すると句構造の変化を知るうえで重要な事実である。II 型構文について特に問題となる例を以下に挙げる。

II 型構文 : *NP が・の NP を Verb

NP_iが [pro_i V と]… V

- (13) 吾^わ妹子^{ぎもこ}が(之) [われを(呼)送ると]…泣^なきし思^{おも}ほゆ (2518)
 'I remember my maid sobbing loud, when she was seeing me off.'

- (14) わご大君の (乃) [^{もろひと}諸人を (乎) ^{いざな}誘ひ給ひ…^{くがね}黄金かもたしけくあらむと]
思ほして (4094)

'The Great Emperor, urging all of his people to … was anxious to get gold.'

- (15) 血沼壮士うなひ壮士の (乃) [^{ちぬそとこ}うつせみの名を (乎) ^{そとこ}争ふと]…妻問ひし
(4211)

'The Chinu lad and the Unai lad, fighting to get their names as men, proposed to her …'

- (16) 家人の (乃) [^{いはびと}われを (乎) 見送ると]立たりしもころ (4375)
'My family stood to see me off.'

(13-16) では主語は接続助詞「と」で選択される従属節の外側にあり、従属節の中の主語は Pro である。主語と目的語が同一節に存在していない為 II 型構文からは除外する。(17-18) に関しても同様に埋め込み構造を仮定することができる。

- (17) そこもか人の (之) [^わ吾を (乎) 言]なさむ (512, 1329, 1376)

'People say this and that of me.'

- (18) 吾妹子が (之) [^わいかにとも^わ吾を思はねば]ふふめる花の穂に咲きぬべし
(2783)

'My darling, though she paid me no heed, may be ready to bloom.'

- (19) さよひめが (何) この山の上に領布を (遠) 振りけむ (872)
'Sayohime waved her scarf upon this hill.'

(18) 例では、主語が主文の要素であると仮定すると、「之」は副助詞「し」と読むのが自然である。なぜなら、格助詞「が・の」は主文の終止形助動詞「べし」とは呼応しないからである。注²最後に(19)では読み下し文では「遠」を

注² 主語表示の「之」は強意の副助詞「し」と読むことが可能である。主文主語が副助詞「し」で表示される場合、終止形と呼応し「を」で表示した目的語を取る SOV 型が可能である。以下に例文で示す。

(i) 妹し (志) 吾を待ちかねて嘆きすらしも (3147)

'Maybe my maid dear is waiting for me at home, heaving a sigh full of dole.'

(ii) 吾妹子し (之) 吾を (阿乎) 偲ふらし (3145)

'My maiden is longing for me.'

強意や疑問など係助詞で表示されるいわゆる「係り結び構文」は CP で認可されると仮定する(柳田 2003 参照)。主文主語が「し」で表示されると終止形と呼応することから (i-ii) の副助詞

格助詞「を」と解釈しているが、「遠」は「緒」と解釈することも可能である。その場合、「領布緒」が「振る」の目的語になり、(19)はⅠ型構文である。以上の観察から上代語では主語、目的語がそれぞれ格表示される SOV 型は存在しない。

次に「を」で表示された目的語が主語の左に移動する OSV 構文は全体で 54 例観察され、その多くが係り結び構文の中で使われている。この構文をⅢ型構文と呼ぶ。

Ⅲ型構文：NP を NP (の・が) Verb (54 例)

- (20) 吾^あが手^をを (乎) 今夜^{こよひ}もか殿^{わくご}の若子^がが (我) 取りて嘆^をかむ (3459)

'My master's young son may hold my hand this evening and heave a sigh of sorrow.'

- (21) われ^をを (乎) 闇^ににや妹^がが (我) 恋^ひつつあるらむ (3669)

'My maid may be long for me in the darkness of this night.'

- (22) 山^はの末^ににいさよふ月^をを (乎) 何時^とともわが (吾) 待ち居^をらむ (1084)

'The moon that lingers behind the mountain yonder I am waiting for to appear at any moment.'

- (23) 紫^をの糸^ををそ (乎) 曾^よわが (吾) 搓^をる (1340)

'I spin some violet thread.'

- (24) 誰^たが手本^{たもと}をか (乎) 可^をわが (吾) 枕^をかむ (439)

'Whose arm may I pillow up?'

Ⅱ型が上代語では存在しないことからⅢ型構文では目的語の動詞句内からの移動は強制的であると言える。すなわち、動詞句内では目的語は無表示、強制移動した目的語は「を」で表示される。さらに、「を」で表示された目的語が動詞句の外に移動するという観察は Kato (2003) の否定文にも見られる。Kato の観察によると、格表示された目的語は常に非連続否定辞「え一ず」において外側になければならない。以下に例文を挙げる。

「し」で表示された主語は係助詞で表示された主語と同様、本来の主語位置にあるⅡ型構文ではなく、CPに移動あるいは基底生成される係り結び構文と同様に扱う。

- (25) a. Kaguya-fime-wo e-tatakafi tome-**zu** nari-nu. (Taketori Monogatari)
 Kaguya-hime-ACC NEG-fight keep-back-NEG do-AUX
 '(We) did not fight and keep back Kaguyahime.'
- b. fitorimi-wo e-kokoro-ni makase-**nu** fodo kotso ... (Genji Suetumuhana)
 oneself-ACC NEG-mind-LOC leave-NEG extent-FOC
 'To such an extent that I could not behave myself at my disposal ...'
- c. kai-wo-ba e-tora-**zu**. (Taketori Monogatari)
 shell-ACC-TOP NEG-obtain-NEG
 '(He) didn't obtain the shell.'
- c. ano kuni-no fito-wo e-tatakafa-**nu** nari. (Taketori Monogatari)
 that country-GEN man-ACC NEG-fight-NEG do
 '(We) didn't fight against the soldiers of that country.'

「を」については再び3節後半で検討する。3節ではまず主語と Tense の関係について論じる。

3. Tense

現代英語では Subject-Aux inversion, Do-support, expletive constructions, to-infinitive など Tense の存在を裏付ける言語現象が数多く存在する。しかし、これらの現象が認められるのは 14 世紀後半の中期英語からであり、Lightfoot (1979)、Gelderen (1993) は古英語では Aux あるいは Tense のカテゴリーは存在しないと主張している。(26) は Gelderen (1993) が提案した古英語の構造である。

(26) Clause Structure in Old English (Gelderen 1993)

[[CP ...[vp ...]]

言語現象に裏付けられた TP などの機能範疇が存在するか否かは長年、通時的、共時的、研究分野のみならず、言語習得の観点からも多くの議論がなされてきた。日本語では TP の存在を裏付ける言語的な証拠が乏しいが、Takezawa (1987) が提示した (27a-b) の例が現在のところ唯一 Tense を裏付ける存在としてあげられる。

- (27)a. 太郎は[花子が賢い／うつくしい]と思った。
 b. *?太郎は[花子が賢く／うつくしく]思った。

Takezawa (1987) は日本語の「が」で標示される主語は (27a) のような時制文でのみ可能であるという事実から日本語の主語は英語と同様に VP 内から IP の指定句 (Spec) の位置に移動すると提案している。一方、現代語と違い、上代語では「が・の」で表示された主語が非時制文 (non-finite clause) に表れると思われる例が数多く存在する。(28) 例で示す「く」は動詞、助動詞、形容詞などの末尾に表れ名詞を派生する接尾辞である (「ク語法」と呼ばれる)。

- (28)a. 吾が (我) 乞ひ祈ま^のく… (4008)
 'I pray to gods.'
 b. 里の (乃) 隠ら^かく惜しも (1205)
 'I am sad that my home recedes from sight.'

一般に時制文が従属節に表れる場合は接続助詞で表示される。(28) では接続助詞を伴わないため非時制文 (non-finite clause) と定義することができるだろう。なお (28a,b) の「く」語法では (29) で示すように、主語は無表示でもよい。

- (29) 梅の花散らま^く惜しみ (824)
 '(They) regret the plum-blossoms falling down.'

名詞化接尾辞「く」をとる述部が無表示主語を許容するという事実から、(28a,b) では「が・の」が属格として名詞を修飾する名詞句ではなく主語、述部から構成される節であるということがわかる。さらに、(27b) に対応する上代語の構造では主語が格表示される (30a) と格表示されない (30b) のどちらも可能である。

- (30)a. わが命の (之) 長く欲しけく (2943)
 'I want my life to be long.'
 b. 赤きぬの純裏^{ひつら}の衣長く欲りわが思ふ (2972)
 'I want a dress of scarlet lining to be long.'

(30)で示すように上代語の「欲し」は主語、形容詞を述部とする節を選択することができる。そして、この非時制文において主語表示が可能なことから上代語の主語は Tense とは無関係であると言える。

最後に主語が Tense とは無関係であるという証拠に「が・の」で表示される主語が受け身の派生主語に表れないという事実がある。受け身の主語を小路(1980)の観察にもとづいて調査した。小路(1980)によると万葉集では「ゆ」(93例)「らゆ」(11例)「る」(14例)のうち、受け身に使われる例は全体で49例ある。

(31)たらちねの母に知らえず (2537)

'Unknown to my mother.'

(32) ^{てをの}手斧取らえぬ (1403)

'I had my axe all but lost.'

(33) 麦食む駒の (乃) [pro 罵らゆれど] なほし恋しく思ひ (3096)

'A horse scolded for eating wheat, nevertheless, wants to eat all the more ...'

小路が挙げた受け身文のうち、主語を伴った例は(32)の一例のみであり格表示される主語は一例もない。(33)では「罵らゆれど」の主語「駒」は「恋しく思ひ」にかかるので従属節「罵らゆれど」の直接の主語は Pro と考えられる。いづれにしても、上代語に動詞句内から TP へ移動することを示す「が」あるいは「の」で表示される主語の存在は確認できない。そこで、古英語と同様に上代語でも TP が存在せず、TP は言語変化の過程で出現したという説を提案する。I 型、III 型構文の構造を (34a-b) に示す。

(34)a. I 型: [_{VP} NP が [_{VP} NP V]]

b. III 型: [_{CP} XP を [_{VP} NP が [_{VP}...]]]

(34a)にある I 型構文が原則として主節で使われないのは日本語では「係り結び構文」に代表されるように、主文は「clause-type」を表す CP まで投射しなければならないためであると思われる。I 型構文は (35)などの係り結び構文では主節に表れることが可能である。

- (35) [CP いづくにか (加) [vP 君が (之) [vP 船泊^はて草結びけむ]]] (1169)
 'Which port in the world did your ship cast anchor at?'

最後に「を」で表示された目的語が vP の edge に表れると思われる構造を IV 型構文として (36-38) に例を挙げる。

IV 型構文: (NP を NP (の) Verb)

- (36) 名木^{な き}の川^{かは}辺^へを (乎) 春雨にわれ (吾) 立ち濡^{いへも}ると家思ふらむか (1696)
 'My wife at home may think that I am standing in the drizzling rain of spring beside the Nagi River.'
 (37) つぎねふ山城^{やましろ}道^ちを (乎) 他夫^{ひとつま}の (乃) 馬より行くに (3314)
 'To Yamashiro with peaks, other women's men go traveling on horseback.'
 (38) いづくにか (可) 君がみ船^をを (乎) わが (吾) 待ち居らむ (2082)
 'I wonder where I should stand and wait for the boat of my man.'

(36-37) は移動した目的語が従属節内に表れる。(38) は主文で係助詞句に後続して表れる。従属節では目的語はより VP に近い機能範疇にあらわれるためこの構文を IV 型構文と呼ぶ。III 型構文では主語が「が」で表示される例は数多く存在するが、IV 型構文では主語は一般に無表示か「の」で表示される。IV 型構文における「が」は一人称代名詞に限り、(39-40) 例の「あが…..なくに」の文末用法で慣用的に使われる以外は (41) が唯一の例外である。注³

- (39) 異しき心を (乎) あが (安我) 思はなくに (3482, 3588, 3775)
 'I have no intention.'
 (40) 君をあが (安我) 待たなくに (3960)
 'I don't wait for you.'
 (41) 君を (乎) あが (安我) 思ふ時は (4301)

注³ 例文 (i) は「花橘を少女らが珠に貫く」とも解釈できるが、IV 型に「が」が用いられる例がきわめて稀なことを考慮し、また前後の文脈から (i) は「が」の連体格としての解釈、「花橘を少女らの珠に貫く」と解釈する。

(i) 花橘を (乎) 少女らが (我) 珠貫くまでに (4166)
 'Until the maidens string the beads of irises'

‘When I think of you …’

そこで IV 型構文の構造を (42a-b) に示す。

IV 型構文

(42) a. [_{VP} NP を [_{VP} NP (の) V]]

b. * [_{VP} NP を [_{VP} NP が [...V]]]

(42a) では、無表示主語と「の」で表示されている主語は動詞句内に表れる。一方、(42b) では、「が」で表示される主語は vP の指定部に基底生成される。(42b) が構造的に適切でないのは light verb が 2 項を同時に認可できないためである。III 型と IV 型の構造 (34b) (42a) から「を」は CP あるいは vP の edge にあらわれることがわかる。

Chomsky (2001) は強意や definiteness など文脈に関する特性 (discourse-related properties) は Phase である CP あるいは vP への移動の結果として生じる意味的特性であると提案している。動詞句から Object Shift する目的語には specificity/definiteness などの意味的要素が付加されることがよく知られている (Mahajan 1992, Laka 1993 など参照)。日本語に Object Shift があるという説は Motohashi (1989) の観察によっても支持される。Motohashi によると、「を」で表示される目的語は definite/referential であり、indefinite/non-referential な名詞は無表示で表れる傾向がある。(43-44) は Motohashi (1989:80-81) の例である。

Definite vs. Indefinite

(43) a. ^{ひともと}一本のなでしこ植ゑしその心 (4070)

‘the heart that planted a flowering pink’

b. ^{しげやま たにべ お やまがき}繁山の谿辺に生ふる山振を屋戸に引き植ゑて (4185)

‘transplant in the garden the yellow-roses that grow about the valley of the wooden mountain’

Referential vs. Nonreferential

(44) a. ^{あかみやまくさね そ}赤見山草根刈り除け (3479)

‘Mt. Akami I mowed and cut all the grasses’

b. 小松が下の草を刈らさね (11)

'It is well (for him) to cut the grass under the small pine'

Definiteness/referentiality などの文脈に関する特性 (discourse related properties) と Object Shift の関係をさらに調べるために以下では代名詞を扱う。日本語では代名詞は本来的に definite/referential であるため、かりに本橋の提案が正しければ代名詞は常に「を」で表示されると予測される。

4. 代名詞

上代語にはロマンス語などに広く見られる strong pronoun と clitics の 2 つのタイプの代名詞がある。

(45)

	Strong pronouns	clitics
1st	あれ/われ	あ/わ
2nd	なれ	な
3rd		し
It/that	それ	そ

strong pronoun は名詞句と同様に無表示、あるいは助詞で表示される。一方、clitics は常に助詞で表示されなければならない。(46-51) は strong pronoun の例であり、(52-55) は clitics の例である。

(46) あれ (安礼) 紐解く (3361)

'We untie our laces.'

(47) あれは (安礼波) 到らむ (3428)

'I will come (to you).'

(48) 汝も (奈礼毛) 吾も (安礼毛) よちをそ持てる (3440)

'Both you and I have children.'

(49) あれを (安礼乎) 頼めてあさましものを (3429)

'I relied on him, who cannot be relied on.'

(50) 里人^{さとびと}の (能) 吾に^{あれ} (安礼迹) 告ぐらく (3973)

'Villagers tell me ...'

(51) 吾よりも (和礼欲利母) 貧しき人の (892)

(52) 君もわも (余毛) 逢ふとは無しに (2557)

‘Both you and I, without meeting each other...’

(53) 汝が母にこられ吾は (安波) 行く (3519)

‘Scolded by your mother, I now go away.’

(54) 嘆きそ吾が (安我) する (3524)

‘I heave a heavy sigh.’

(55) 吾を (安乎) 忘らすな (3457)

‘I wish he wouldn't forget me.’

表 (56) に万葉集の clitics と助詞の共起関係を示した。

(56) 万葉集における clitics と助詞の共起関係 注⁴

	strong pronoun	clitics
も	+	+
は	+	+
を	+	+
が	—	+
に	+	—/+
の	—	—
より	+	—

(57) に代名詞に関する一般化を挙げ、strong pronoun と clitics の共起関係については 5 節で再び検討する。注⁵

(57) 目的語代名詞は常に「を」で表示される。目的語代名詞は常に動詞句の外側に表れる。

注⁴ 万葉集の中で「寄す」という動詞に選択された代名詞に 3 例 (3468, 3478, 3305) に「に」が clitics と共起する例がある。例文 (i) で示す。

(i) 汝に (奈奈) 寄そりけめ (3468)

しかし、(50) を含め選択されている他の例ではすべて strong pronoun であらわれる。

注⁵ 代名詞は底本で「和礼・奈礼」などの万葉がな表記される例文を対象に調べた。「吾・汝」が単独で使われる場合、格表示の有無の取り扱いが不明なため対象から外した。

5. 再分析 (Reanalysis)

5. 1 「が」の再分析と句構造の変化

さて、伝統文法では、主節平叙文での「が」使用は室町時代後期に確立したとされている(柳田 1985 参照)。山田(2000)は平家物語(13世紀鎌倉時代)と天草版平家物語(1592年成立)を比較し、主文での主格の「が」がどのように拡大して行ったかを調べた。平家物語では無助詞であったもののうち「が」と「の」の使用頻度の割合を(58)に示す。

(58) 天草版平家物語(1592成立)の主文での使用頻度(山田 2000)

	他動詞	非能格	形容詞	非対格	合計
が	2 (2%)	13 (16%)	15 (18%)	54 (64%)	84 (100%)
の	1 (25%)	1 (25%)	0 (0%)	2 (50%)	4 (100%)

16世紀後半の主節での「が」の使用は現代語とは異なり、他動詞の主語として使われる例は稀で、ほとんどの場合が非対格自動詞に限られていることがわかる。すなわち、現代語の基本語順である II 型構文がこの時代ではまだ確立されていないと想像される。

主語表示の「が」がどのように拡大したかについてはさまざまな仮説があるが、その中で係助詞「ぞ」との関係を提案する説がある。以下、山田(2001)から先行研究を抜粋する。「主格「ガ」は係助詞「ゾ」等の退いたあとに、強調表現の主語の位置に入った(久島 1986)」「「ゾ」の役目を「ガ」が引き受けた(大野 1993)」「係助詞「ゾ」が消滅した結果主語表示の助詞として「ガ」などの助詞が用いられた(安達 1992)」以上の国語学的な説明を構造的に示したのが(59)である。

(59) a. [_{CP} XP ぞ [_{VP}.....]]

b. [_{CP} NP が [_{VP} t [_{VP}...]]] (16世紀後半)

(59)で示す史的变化により「が」の「再分析」案を(60)に示す。

(60) 「が」の「再分析」案

a) 「が」表示主語が vP から CP へ移動する。係助詞「ぞ」の消滅。

- b) Focus Prominent language から Subject Prominent language への移行
(Kiss 1995 参照) この類型的变化は Indo-European 言語にも見られる。
(Lehmann 1974, 1976, Hock 1986, 1992 参照)
- c) 他動詞構文へ「が」の拡大

山田 (2000) の観察に従えば天草平家では主節での「が」の使用は自動詞に限られていたので、(61)に示すような他動詞構文へ拡大したのは天草平家以降であると考えられる。

(61) 他動詞

[_{CP/TP} NP が [_{VP} NP を [_{VP} ...]]]

「が」の史的变化が日本語の句構造の変化を決定づける要因であることを見てきたが、「が」と文構造の変化をどのように理論的に関係づけるかという問題を扱わなければならない。これはちょうど英語の to-infinitive の構造的変化と to の再分析化に関する議論に似ている。古英語の to-infinitive の特徴を (62) に示し、(63) に例文を挙げる。

(62) To-infinitives in Old English

- a. 目的語は to の左に表れる
- b. to-infinitive は主語を取らない。
- c. passive, have をとらない。
- d. to を動詞から分離することはできない。
- e. to-infinitives は subjunctive clause を選択する動詞の補部として表れる。
(Los 1999 参考)

(63) a. Ne com ic [_{VP} sybbe to sendanne].

'I did not come to send peace.' (First West Saxon Gospel: Miller 2002, 188)

b. Heo bið afre geara [_{VP} men to acwellene].

'She is always ready to kill men.' (LS 29 340, :Kageyama 1992, 116)

Los (1999) は (62a) に示す理由から to は動詞句内に基底生成され、(62e) に示す理由から to-infinitive は subjunctive clause と同じ CP 構造を持つと提案し

ている。古英語の to-infinitive が Loss の主張する CP 構造を持つと仮定すると、古英語では to は動詞句内に基底生成され、TP の出現とともに Tense へ移動する (64) で示す史的变化があったと想像される。

(64) $V \left[{}_{CP} \dots [{}_{v}to \left[{}_{VP} \dots V \dots \right]] \right] > V \left[{}_{TP}NP \left[{}_T to \left[{}_{VP} \dots V \dots \right] \right] \right]$

日本語史において、(59b) に示す変化が起こったと仮定すると、その変化は古英語の to-infinitive の史的变化と非常に類似していることがわかる。

5. 2. Relabeling 「再範疇化」 (Whitman 2000)

Lightfoot (1991) は語彙の「再分析」によって句構造全体への変化が起こることを指摘している。代表的な例が上述した to-infinitive や古英語での動詞の助動詞化などがあげられる。最近のミニマリストでは、Lightfoot の「再分析」(reanalysis) を語彙素性の強弱の変化と捉え、それにより引き起こされる移動の獲得や消失によって語順の変化が起こると考えられている (例えば Robert 1997 参考)。ミニマリストモデルの枠組みで、Whitman (2000) は (65) にある「再範疇化」(relabeling) モデルを提唱している。

(65) Relabeling (Whitman 2000)

“The first step of syntactic reanalysis is restricted to relabeling, where relabeling refers to a change in the categorial feature of a head. The result of relabeling must be well-formed independently of any changes outside the minimal domain of the relabeled items.”

(66)

$$\begin{array}{c}
 \text{XP} \\
 \swarrow \quad \searrow \\
 \text{YP} \quad \text{X'} \\
 \quad \quad \swarrow \quad \searrow \\
 \quad \quad \text{X} \quad \text{ZP}
 \end{array}$$

Whitman は語彙の「再範疇化」(relabeling) により引き起こされる構造的変化を Pruning と呼び、語彙 X の最小領域 (minimal domain, Chomsky 1995:178) に限られると提案している。すなわち、(66) の X に対して YP と ZP が X の最

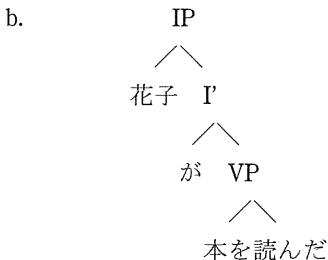
小領域であり、X の形態的変化の影響を受ける領域である。To-infinitive の史的变化一すなわち、与格 (dative Case) の消失、明示的主語の出現、passive や助動詞 have の出現などはすべて to の最小領域 (minimal domain) での変化であり、to の「再範疇化」に起因すると言える。

6. 日本語の Head Initial 構造

さて日本語の構造的変化が格助詞「が」の形態的変化と深く関係していることは前章で指摘した。しかし、かりに「が」が後置詞として項と結びついて主語を形成すると仮定するとその変化は(65)の再範疇化 (relabeling) の定義に厳密に従えば主語に C-統御されていない外側の構造に影響を及ぼすことはできない。すなわち、助詞の形態的変化と文構造の変化を理論的に関係づけることはできない。

この問題を解決するために以下では日本語の格助詞「が」は文の主部であるという Kayne-Whitman 仮説を採用する。Kayne(1994)の LCA に従い、Whitman (2001)は、(67a)の文では「が」が IP の主部である (67b)の head initial 構造を提案している。

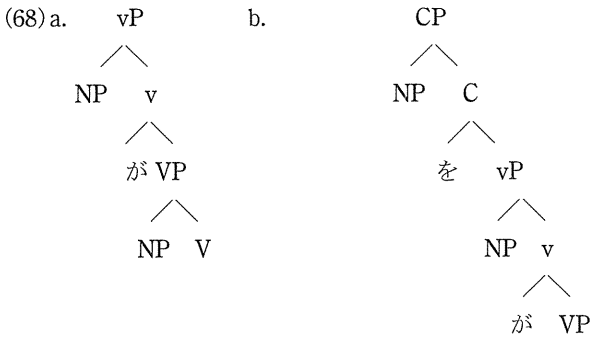
(67)a. [_{IP} 花子が [_{VP} 本を読んだ]]



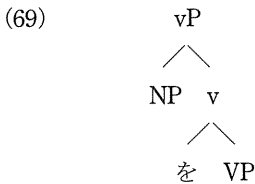
Whitman (2001)

(67b)の構造を仮定すると、「が」の最小領域は「が」の補部である VP と主語が移動する指定部である。すなわち、「が」の形態変化が文構造全体の変化へ影響を及ぼしたという事実は理論的に説明可能になる。これに従うと I 型と

III 型構文は (68a-b) になる。注 6



一方、IV 型構文では「を」が vP の主部であり、Object Shift を認可する。



すなわち、「を」は格付与をする形態格ではなく、動詞句 (VP) を支配するどの機能範疇にも表れることが可能である。その場合「を」は、単に D あるいは EPP 素性を持ち、その指定部移動する N あるいは D と素性照合する機能範疇であると言える。目的語は動詞句内で動詞により選択された唯一の NP であり、結果的に、「を」の指定部に移動する。

注 6 (i-ii) のように「を」が係助詞と共起する例は上代語では数多くみられる。

(i) 紫の糸をそ (乎曾) わが (吾) 搓る (1340)

'I spin some violet thread.'

(ii) 誰が手本をか (乎可) わが (吾) 枕かむ (439)

'Whose arm may I pillow up?'

ここでは Rizzi (1997) がロマンス言語やゲルマン語の Topic-focus 構造の分析で提案した C-システムの重層構造を採用し、係助詞「ぞ・か」は CP の主部に位置し、「を」が C-システムの下層構造の主部から上層構造の主部へ移動する (iia) あるいは係助詞より上層構造に基底生成される (iib) のいずれかを提案する。

(iii) a. $[_{CP1} \text{を}_1 \text{か} [_{CP2} t_1 \dots [_{VP} \dots V]]]$

b. $[_{CP1} \text{を}_{CP2} \text{か} \dots [_{VP} \dots V]]]$

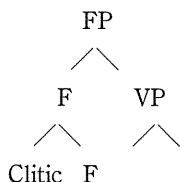
(70) a *太郎は[_{PP} 花子に]_iを[_{VP} _{t_i} 会った]。

b. [_{PP} 花子に]_iは太郎が[_{VP} _{t_i} 会った]

例えば、(70a) では「花子に」は後置詞句 PP であり、「を」の D 素性と照合しないため非文になる。(70b) では「は」は後置詞句の移動を許す。

さらに、表 (56) に示したように、clitics は係助詞、格助詞「が・を」とは共起するが「の・より」などの後置詞とは共起しない。clitics は自立語ではないため、通常動詞句内から移動し、機能範疇の主要部に付加される (71) に示した構造的特徴をもっている。

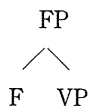
(71)



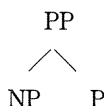
(Kayne 1991)

Kayne(1991)の提案をもとに Zwart (1991)はオランダ語の clitics の位置を T とし、Koster (1975)以降オランダ語が OV 言語であるという多くの提案に対しオランダ語は T の主部が左側にある Head Initial 言語であると主張している。同様に上代語で代名詞が動詞句内に表れないという事実と clitic pronouns という非自立語が存在するという事実は機能範疇が動詞句に対して左側にくる Head Initial な構造を仮定することにより理論的説明が可能になる。さらに、clitics と助詞の共起関係から助詞には (72) に示す2つのタイプがある。(72a) に属する助詞は動詞句を支配する機能範疇の主部に表れ、(72b) に属する助詞は後置詞として名詞句と結合して PP を形成すると言える。

(72) a.



b.



F: は, も, が, を (に)

P: の, に, より

伝統文法では一般に「の」が主格として確立しなかったのは「の」と「が」の意味的違いに起因すると考えられてきた（柳田 1985 参照）。2つのタイプの助詞を認めると、「が」が主語表示として確立した理由に対しても厳密な理論的説明が可能になる。

6 章の結論：

機能範疇における主部パラメータを排除することにより、1章で示した Fukui (1993)の移動のパラメータ(3-4)は廃止され、移動は UG 原理により厳密に定式化される。

7. まとめ

本研究では、上代語の明示的項をとる他動詞構文に焦点をあてて、日本語の句構造の変化について考察した。

- 1) 上代語では目的語は VP 内では助詞を伴わない。代名詞は VP 内に表れることができない。
- 2) 目的語が動詞句外の Phase (CP, vp) に強制移動する時にのみ「を」で表示される。
- 3) 古英語と同様に上代語では TP の言語的証拠が存在しない。
- 4) 古英語の to の「再範疇化」と同様に「が」は Tense への「再範疇化」と捉えることができる。共に文の主部であるという仮説から文構造の重要な変化を言語史の一般理論より説明することが可能である。
- 5) 日本語には2つのタイプの助詞がある。(1) 機能範疇の主部にあらわれ、その意味的、形態的变化が文構造全体の変化に影響を及ぼす助詞 (2) 意味的、形態的变化が直接文構造に影響を及ぼさない後置詞句を形成する助詞

最後に、機能範疇の主部パラメータを廃止するという案は Kayne (1994) 本来の主張とは異なり、語彙範疇にはパラメータを残すことになる。これは子供の言語習得との関係からも妥当な仮説である。すなわち、子供は語彙範疇の First Merge での Head Initial と Head Final な2つのパラメータの値は決定しなければならない。Borer & Wexler (1987) の習得理論では機能範疇は UG 原理に従って習得の段階で付加されていく、いわゆる Maturation Theory を提案している。

これに従えば、Kayne(1994)の LCA は機能範疇を付加していく言語発達の段階でそれを検知する原理として捉えることが可能である。本稿で提案した機能範疇の Head Initial 仮説は言語の史的変化、あるいは言語習得の観点からさらなる実証的議論が必要であり今後の研究課題とする。

電子テキスト

Japanese Text Initiative Electronic Text Center, University of Virginia Library
(<http://etext.lib.virginia.edu/japanese/jti.texts.euc.html>)

国文学研究資料館 (http://www.nijl.ac.jp/contents/d_library/index.html)

吉村 誠 ホーム ページ (<http://yoshi01.kokugo.edu.yamaguchi-u.ac.jp/manyou/manyou.html>)

テキスト

小路一光 (1988) 万葉集助詞の研究 笠間書院

小路一光 (1980) 万葉集助動詞の研究 明治書院

中西進 (2002) 万葉集 講談社文庫 (1980 初版)

万葉集 日本古典文学大系 4-7 岩波書店

Teruo Suga (1991) The Man'yo-Shu. Kanda University of International Studies.
Kanda Institute of Foreign Languages.

参考文献

大野晋 (1993) 『係り結びの研究』 岩波書店

大野晋 (1977) 「主格助詞ガの成立」『文学』45, 102-117.

金水敏 (1993) 「古典語の「ヲ」について」『日本語の格をめぐって』191-224
くろしお出版

近藤泰弘 1980 「助詞「を」の分類—上代—」『国語と国文学』57-10.

野村剛史 (1993) 「上代語のノとガについて」『国語国文』62-2, 1-17, 62-3, 30-49.

竹沢幸一・John Whitman (1998) 『格と語順と統語構造』 研究社

山田昌裕 (2000) 「主語表示「が」の勢力拡大の様相-原拠本平家物語と天草版平家物語」との比較-」『国語学』51-1, 1-14.

山田昌裕 (2001) 「主語表示「が」の強調表現における勢力拡大の様相」『国語国文』70-8, 32-48

柳田征司 (1985) 『室町時代の国語』 東京堂

柳田優子 (2003) 「が」の再解釈と日本語の句構造について—一句構造の普遍性に関する Kayne (1994) の史的検証—『次世代の言語研究 II』1-24 筑波大学現代言語学研究会 (編)

- Borer, Hagit and Kenneth Wexler (1987) The maturation of syntax. In *Parameter setting*, ed. Thomas Roeper and Edwin Williams. 123-172. Dordrecht: Reidel.
- Chomsky, Noam (1995) *The minimalist program*. Cambridge, Mass.: MIT press.
- Chomsky, Noam (2001) Derivation by phase. In *Ken Hale: A life in language*, ed. Michael Kenstowicz. 1-52. Cambridge, Mass.: MIT press.
- Fukui, Naoki (1993) Parameters and optionality. *Linguistic Inquiry* 24, 399-420.
- Gelderen, E. van (1993) *The rise of functional categories*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hock, Hans Henrich (1986) *Principles of historical linguistics*. Amsterdam: Mouton de Gruyter.
- Hock, Hans Henrich (1992) Reconstruction and syntactic typology: a plea for a different approach. In *Explanation in historical linguistics*, eds. G. W. Davis and G.K. Iverson, 105-121. Amsterdam: John Benjamins.
- Kato, Yasuhiko (2002) Negation in Classical Japanese: A preliminary survey. *Sophia Linguistica* 49, 99-119.
- Kato, Yasuhiko (2003) Negation in Classical Japanese: A minimalist perspective. Sophia University ms.
- Kayne, Richard (1991) Romance clitics, verb movement, and PRO. *Linguistic Inquiry* 22, 647-686.
- Kayne, Richard (1994) *The antisymmetry of syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kiss, Katalin (1995) *Discourse configurational languages*, Oxford: Oxford University Press.
- Laka, Itziar (1993) Unergatives that assign ergative, unaccusatives that assign accusative. *MIT Working Papers in Linguistics* 18, 149-172.
- Lehmann, Winfred P. (1974) *Proto-Indo-European syntax*. Austin: University of Texas Press.
- Lehmann, Winfred P. (1976) From topic to subject in Indo-European. In *Subject and Topic*, ed. Li Charles, 445-456. New York: Academic Press.

- Lightfoot, David (1979) *Principles of diachronic syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lightfoot, David (1991) *How to set parameters: arguments from language change*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Los, Bettlou (1999) *Infinitival complementation in Old and Middle English*. The Hague: Holland Academic Graphics.
- Mahajan, A.K. (1992) The specificity condition and the CED. *Linguistic Inquiry*, 23, 510-516.
- Miller, Gary D. (2002) *Nonfinite structures in theory and change*. Oxford: Oxford University Press.
- Miyagawa, Shigeru (1989) *Syntax and semantics: Structure and case marking in Japanese*. New York: Academic Press.
- Motohashi, Tatsushi (1989) Case theory and the history of the Japanese language. Doctoral dissertation, The university of Arizona.
- Rizzi, Luigi (1997) The fine structure of the left periphery. In *Elements of Grammar*, ed. Liliane Haegeman, 281-337. Netherlands: Kluwer Academic Publishers.
- Roberts, Ian (1997) Directionality and word order change in the history of English. In *Parameters of morphosyntactic change*, eds. A van. Kemenade and N. Vincent, 397-426. Cambridge: Cambridge University Press.
- Takezawa, Koichi (1987) A configurational approach to case-marking in Japanese. Doctoral dissertation, University of Washington.
- Watanabe, Akira (2001) Loss of overt *wh*-movement in Old Japanese and demise of *Kakarimusubi*. In *Proceedings of the COE International Symposium*, ed. Inoue, Kazuko Chiba:Kanda University of International Studies.
- Whitman, John (2000) Relabeling. In *Diachronic syntax: models and mechanisms*. Oxford University Press.
- Whitman, John (2001) Kayne 1994: P.143, FN.3. In *The minimalist parameter*, eds. Alexandrova, Balina M. and Olga Arnudova, 77-100. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Zwart, Jan-Wouter (1991) Clitics in Dutch: Evidence for the position of Infl. *Groninger Arbeiten zur germanistischen Linguistik* 33, 71-92.